「若宮丸漂流民物語」を口演する石巻出身女優の鈴鹿景子さん
（石巻禅昌寺、2007年）

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長　平川 新（ひらかわ あらた）

未来への航路

②石巻若宮丸漂流民の会

無名の漂流民

今から230年ほど前の1794年、江戸に向かって石巻を出帆した若宮丸がいわき沖（福島県）で遭難し、アリューシャン列島に漂着しました。ロシアに保護された漂流民たちは10年後の1804年に、ロシア使節レザーノフによって長崎に送還されます。ロシアが派遣した遣日使節は、1792年に伊勢国の漂流民大黒屋光太夫らを根室に送還してきたラクスマン以来、2回目でした。

この2つの漂流民送還は日本の対外関係にとって、いずれも重大事項でした。しかし高校の日本史教科書には大黒屋光太夫の名前が記されているだけで、若宮丸漂流民の名前はありません。

大黒屋光太夫は小説や映画になるほど有名です。三重県鈴鹿市には大黒屋光太夫記念館もあり、光太夫についての研究もたくさんあります。ところが若宮丸は地元でもあまり知られておらず、研究も数えるほどしかありません。それが知名度の差になっていたのです。

そこで誕生したのが、「石巻若宮丸漂流民の会」でした。若宮丸漂流民の研究を促進し事績の顕彰をするために、いまは無き石巻文化センターで2001年に設立総会が開かれました。会長は石巻高校の石垣宏先生。副会長には当時東北放送の常務だった木村成忠さんと私。事務局長は大島幹雄さんという体制でスタートしました。

石垣先生は石巻市史で若宮丸漂流民を執筆しました。石巻出身の木村さんは、ディレクター時代に若宮丸漂流民のラジオドキュメンタリーを制作していました。大島さんは『魯西亜から来た日本人 漂流民善六物語』を書いた石巻出身の作家です。それぞれ石巻や漂流民への強い思いを抱いた方々でした。

日ロ関係史の研究

私はその前年の2000年に大学で、「前近代における日露交流史料の研究」というプロジェクトを立ち上げていました。研究が手薄だった江戸時代の日ロ関係史を深めるために、ロシアの歴史研究者の協力を得てロシア側の史料を集めていたのです。それを知った石垣先生が会の発起人に私を誘ってくださったのでした。

開国といえばアメリカのペリー艦隊の来航を指すことが多いですね。しかし、それより61年も前に、ロシアは日本に漂流民送還を口実に通商を求めていました。これを機に日本は外国勢力の接近に危機感を強め、オランダ以外のヨーロッパ国とは通商しない方針を確認しています。鎖国といわれる対外政策は、厳密にいうとロシア船が来航したことで幕府も初めて自覚したのでした。鎖国という言葉が生まれたのも、このころのことです。

であれば、ロシア使節来航のチャンスを与えた日本人漂流民の存在自体が、日本の外交史にとって大きな意味をもっていることになります。しかも若宮丸漂流民は、石巻やその近在の人たちでした。外交史というテーマと郷土史をつないだ研究ができるのではないか。私が若宮丸漂流民に着目した理由は、そこにありました。

こうして私と石巻との二つめの接点が生まれました。しかもその漂流民研究をきっかけに、江戸時代の日本のイメージを大きく変えるヨーロッパの情報も入手できたのです。その話は、また改めて。

（次回は9月18日）

若宮丸漂流民の会設立総会で挨拶する石垣宏会長

ひらかわ・あらた
昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26―31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。